

大地

第 44 号
2013.9.30. 発行
浄 國 寺
上 藤 町 3 丁目 14-10
☎025-523-5724

俳句

山崎 睦

春嬉し雪の高田に住めばこそ

万緑の寺領に響く箏の曲

Tシャツの胸はロンドン更衣

冷房の好きも嫌ひもなき暑さ

コーヒーにワインケーキや藤の椅子

老いてなほ露の己れを頼みをり

念仏の日々とはゆかず花八ツ手

老いてゆくことも喜び梅の花

洋館は明治の作り秋の薔薇

(平成十一年作)

便利になつたけれど

山崎隆昌

越後平野は、早春の雪解けとともに、重く暗い冬の生活から解放され一気に活気づき人も自然もいのちが躍動する。

六十年も前のむかし、冬季は今のよう大型機械による除雪など無く、雁木の他はもっぱら積もった雪の細い道を歩いたものだ。

前夜に雪が降ると、早朝まだ薄暗い中からマントを被り、わらぐつにカンジキを付け、降りしきる雪の中を、雪を一步一步踏みつけながら、家の玄関から隣家に届くまでの五十メートルほどの道路の道つけをさせられた。

解け初めて雪の表や沈みゆく 高浜年尾

長い冬も終わり、雪消えの始まる三月、沈んで低くなった雪をやたら掘り、中から黒い土が見えてくると子供心にも嬉しく、黒土を長靴で踏むだけで、何かしら暖かいものを感じたものだった。

やがて高田公園の桜花も散りおわり、葉桜に変わる頃には頸城平野は五月初夏の季節、一面に広がる水田に早苗が風に揺れ、山の木々の芽吹きは生き生きと美しく目に映える。

日本画家の柴田長俊氏は、図録のエッセイ『良寛の風景』で、頸城野の初夏について、

「私の育った上越市の自宅裏は小学校に入るまで、一面の水田だった。はぎ木が並び、小さな川が流れ、遠くまで続く風景があった。田に水が入り、緑を植える早苗のころ、良寛が見たであろう蒲原平野と重なる思いがある。光が風に揺れ、緑の早苗も風に合わせ、まるで風の舞いが見えるようだ」と書かれている。戦後約七十年、目に見える風景も人間の暮らしも、すっかり変わった。そして今もハイスピードで止めどなく変わり続けている。便利で、快適な生活環境が整えられて来た。

わが家は水が悪かった。台所の流台の横につるべ井戸があったが、まっ赤な水で漉瓶で漉して使った。それも夏には涸れてしまう。そこで一日に何回かリヤカーにバケツをつけて、近くの寺の湧き水池から家まで運んだ。

母は、わが家に水道が引かれた時、涙を流さんばかりに小躍りして喜び、死ぬまでその時のことを、繰り返し話してくれた。このハイスピードの変化は、便利さと引き換えに、自然にも、社会環境にも、そして人間の心にも、歪みをもたらしていると思う。

原発はブレーキが整備不良の自動車の様だ。今は、人間関係の崩壊した「無縁社会」と言われ、自殺(自死)率も世界一。

悲しいことに、かく言う私自身が普段の生活では、便利さに首まで浸かり、自らの心の歪みに気づかず当たり前に暮らしている。

五劫の擦り切れ

山崎隆史

どなたかに『正信偈』の「五劫思惟之撰受」の「五劫」とは何か、と聞かれ、落語の「寿限無」という噺の「寿限無寿限無五劫の擦り切れ」の事を説明しました。改めて調べなおした所、一部間違いがあり、また興味深い話でもあるので、訂正がてらご紹介します。

「劫」とは、時間の長さの単位で、とてつもなく長い時間を表します。古代インド語の「カルパ」を漢訳したものです。

現代インドのヒンドゥー教でも使われており、1カルパは四十三億二千万年だそうです。

仏教では具体的な長さは定めておらず、とにかく長いながい間、を表す単位です。『大智度論』という書物には、「一辺四十里（約二十km）の岩に三年に一度、天女が舞い降りて羽衣でなで、岩がすり切れてなくなってしまうまで」とあるそうです。落語の「寿限無」では、「須弥山」に「百年に一度」舞い降りる、と更に大げさになっています。

「五劫思惟之撰受」というのは、『仏説無量寿経』で法蔵菩薩（阿弥陀仏が覺りを得

る前の名前）が五劫の間思惟し続けた後、一切衆生を救う為の手段として四十八の願（本願）をえらばれたことを示します。

その後、永劫の修行の後覺りを得、本願を成就して阿弥陀仏とされます。和讃に「弥陀成仏のこのかたは いまに十劫をへたまへり」とあるように、阿弥陀仏となられて（成仏されて）から、十劫という時を経て

います。

さて、「五劫思惟」を形に表した「五劫思惟阿弥陀仏像」という像があります。日本にくつかあるそうですが、一番見やすいのは京都の「金戒光明寺」（通称黒谷さん）にあるものだと思います。如来像の頭髮は「螺髪」といって、髪の毛を巻貝のように巻き固めたものとして表現されます。それが「五劫思惟阿弥陀仏像」では、頭がひと周りもふた周りも大きくなっています。



金戒光明寺
五劫思惟阿弥陀坐像

衆生を救うため、身だしなみも気にせず長い時間思惟し続けたため、髪の毛が伸びて量が増えた事を表しています。本来はこれをありがたく受け止めるべきなのでしょうが、涙などはつい「髭は伸びないのだなあ、今は散髪しておられるんだなあ、などと考えてしまいます。煩惱の為せる業なのでしょう。

嶋田さんの光君

滝寺の嶋田さんが六月に亡くなられた。私と同じ年の昭和十九年生まれ。享年六十八歳。昨年晩秋の、名古屋、郡上方面の参拝旅行にご一緒し、さらに十二月の旅行打上げでも愉快に飲んだものだ。やはりさみしい。

葬儀はご自宅で執り行われた。お勤めする私のすぐ後ろに嶋田さんのご家族が並ぶ。

ところで、嶋田さんには一男二女のお孫さん。午前のお勤めが終わり、午後には還骨・初七日のお勤めがある。始まる時間まで待っていると孫の長男君がやってきて「勤行本を見せて下さい」と言う。受け取った彼は「正信偈」のところを真剣に見ている。彼は小学四年生。そして満足そうに言った「十二個あるんだ」。そう「正信偈」一二〇句、八四〇字の中に「光」の字は十二個あるのです。ちなみに長男君の名前は光（ひかる）君。（隆昌記）

お磨きの楽しみ

北本町三 横関 レイ子

浄国寺恒例の莊嚴仏具のお磨きが、今年は七月三十日に行われた。

私が本堂に着くと、すでに五名ほどの方が作業をしておられた。

私はまず仏様に「今年もまたお磨きに来ることができました。この一年間ありがとうございました。去年のお磨きが、つい昨日のように思い出されるのに、月日の経つのはなんと早いことか。

一時間ほど作業すると、早くも十時の休憩になる。お磨きの楽しみと言えば、何と云ってもこの仕事の合い間にいただくお茶である。作業中はもちろんのこと、お茶を飲みながらの会話がいつも楽しい。普段は会わない老若男女が顔を合わせる席、さまざまな人生経験を積んでこられた人々のお話を聞けるのは、非常に有意義な時間である。

そして、今回テーブルの上に並べられた茶菓の中でもとりわけ目を引いたのは、オレンジ色が目にも鮮やかなニンジンゼリーだった。これは当初初めて参加されたKさんが、わざわざ作って持って来て下さったとのこと。聞けばニンジンの他に牛乳や梅酒も入っているという説明で、Kさんがとても料理上手な人

であることが窺える。

さらに隣には、透明なガラスのお皿に盛られた瑞々しいまくわ瓜。二種類のまくわの白とエメラルドグリーンのコントラストが、実に美しい。さっぱりとした甘さが、どこか昔懐かしい味がする。これもまたKさんの畑で採れたそうで、メロン好きの私には何とも羨ましい限りである。

続いてもう一品、鉄紺色のおいしそうなナスの漬物。Kさんのもぎたての十全ナスは、漬物にしても柔らかく美味である。

私は町中の人間にしては珍しく、ちまきも赤飯も作ることができる。カスタードプディングもクレープも作れる。それなのに、漬物だけは何をやってもうまくいかない。(漬物が大嫌いな人と一緒に暮らしているせいでない) だから、Kさんのようにゼリーだけでなく漬物も上手にできる人を、本当に尊敬してしまふ。

ひと休みの後は仕上げ磨きにかかるが、常連のAさんやBさんの姿が見えないと話題になる。Aさんはお身体の調子が優れないらしい。今ご本人達は知る由もないが、こうして心配してくれる仲間がいるということは何と幸いなことかと私は胸の内と思う。次回の秋のお磨きには、お二人とも元気でまたお目にかかれよう。

私がお磨きに顔を出すもう一つの大きな理

由。それは、昼食に奥さんのおいしい手料理をいただけることである。普段お昼は一人なので残り物で済ませている私にとって、よそ様のお宅でいただくご飯は何でもおいしく感じられる。

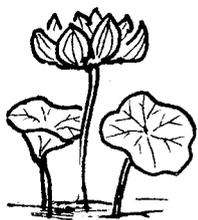
しかしながら、この日はご住職がお昼に電車で出かけられるため、奥さんが駅まで車で送って行かれるとのこと。昼食はすでに豪華な仕出し弁当が用意されて居た。私達が先にご馳走になっていると、途中で奥さんが戻ってこられた。

この後の女性軍の賑やかなおしゃべりに恐れを成したのか、男性二人は早々に引き上げられる。主婦達の世間話は尽きることを知らない。話の花が咲き、ついつい時間が経つのも忘れてしまうほどだった。本当はこの時間が一番楽しいのかも知れない、と思うくらいである。

昼食後、お皿には三つほどナスの漬物が残っていた。私は遠慮せず、それらをありがたくいただいて帰ってきた。幸せなことである。

そして迎えた、うら盆会永代読経法要。お経が始まる前に本堂で、再びKさんと顔を会わせた。私は言った。

「この間はご馳走さまでした」



ワン公物語⑤



蓮のつばやき

山崎蓮(慎子代筆)

私はれん(蓮)。パグという種類の犬。十三歳の雌である。

母さんがまたいない。母さんは時々姿をくられます。二、三時間から三日間位まで。でもたいていは「行って参りませう」と、父さんや兄さんに声をかけるけど、私達には黙って出かけてしまう。

それは多分『犬のしつけ』なんて本を読んで忠実に守っているのに違いない。「出かける時はさりげなく」なんて書いてあるのだ。尤も確かにその方がこちらとしても、当り前のこととして軽く受け止められて良いのかも知れない。

その代り帰って来た時は「れん、はな！ ください。良い子にしてたー」といって抱きしめたり、なでてくれたり、その時の嬉しさと言ったら！ はな公と一緒に私も、すっかり垂れ下がってしまった尻尾をフリフリする。でも今度だけは様子が違っていたのだ。このところの暑さもあって、ここ数日母さんは何だか落ち着かない様子だった。そしてある日、大きな荷物を持って母さんがいなくなつた。その夜も、次の夜も帰らず、少し不安に

になり始めた三日目のお昼近く、母さんの気配がした。

でも、どうしたんだろう。足音もしているし、話し声も聞こえるのに、いつものように「れん、はな」と跳んで来てくれないのだ。声にも元気がないし、いつもと違う妙なメガネをかけてもいる。

私達に餌を運ぶのも、目や耳の手入れも、汚れたシートの交換も、みんな父さんと兄さんがやってくれている。

「おねえちゃん、母さんどうしちゃったんだろう。私達のこと嫌いになったのかなあ」さすがにヤンチャなはなも不安を訴える。

「どうしたんだろうね。何があったんだろうね。もう少し様子をみていよう」私は、姉らしく答えておく。

実は、母さんは目の手術をしたのだった。入院案内に「老人性白内障」と書いてあったと苦笑いしている。でも母さん、六十六歳で老人性ならまっとうでしょ。と私は思う。

これが三十代や四十代なら、それはちょっとショックかも知れないけど。だから母さん、そんなことを気にするのはつまらないことだよ。と私は思う。

その点、犬族はなんて大らかなんだろう。私はここ一、二年、それこそ白内障で目は殆ど見えない。勘に頼って動いているけど、あちこちぶつかったり、溝に落ちたりだ。けど

失敗をしても、ま、イイか。と思っている。状況を受け入れるのがうまいんだな。我ながら偉いぞ！と自分をほめる。

母さんは日毎に元気を取り戻しているようで、少しづつ、私達ワン公の所にも来てくれる。母さんは入院した晩、はなと私の夢を見たんだって。母さんは優しくなながら「れん、はな、夢に出て来てくれて有り難う」と囁く。出た覚えの無い私は一体ナンのことかと思うが、母さんが嬉しかったのなら、ま、イイか。

一華のつばやき

おねえちゃんがない。いつまで待ってもいない。れんねえちゃん、あの日苦しそうにしていたけど……。昌子姉さんに添い寝して貰って「痛い痛い」とんでけーってなで貰ったりしてたよね。お盆休み明けの獣医さん所に行ったり、眠ったまゝで帰って来てそれからどうなったの？

カサカサ音のする小さな箱を「れんだよ」って言われたけれど。私はおねえちゃんの帰りを待ってるんだ。ただ時々「はな、良い子にしてるんだよ」というおねえちゃんの声が、ふと聴こえるような気がして寂しくなってしまう。ま、イイかとはなかなか言えないんだけど、でも多分そういうことなんだね。おねえちゃん。

まだ、あたしはおねえちゃんを待っている。